仕事をしない魔女

雨澤はる

目次

第１話「掃除の依頼」 1
第２話「ダイエットの依頼」 4
第３話「証拠隠滅の依頼」 6
第４話「新商品選定の依頼」 9
第５話「後遺症抑制の依頼」 11
あとがき 13

第１話「掃除の依頼」

　私は仕事をしない魔女だ。
　きょうも、仕事の依頼でアパートに向かっている。もちろん、魔法の箒で空を飛んでいるんだ。
　えっ、仕事をしないのに、なんで仕事の依頼があるのかって？　　それは目的地についてからのお楽しみ。
　依頼主が住んでいるのが、四丁目のゴーレムハウスだから、あのアパートだな。古いが、まだじゅうぶん住めそうだ。だが、お金持ちやお嬢さんの住むような立派なアパートでもないな。学生さんや貧しい人向きに見える。
　私は、アパートの前に降り立つと、箒を逆さにして、ゴーレムハウスの階段を上り始めた。依頼主は二階に住んでいるのだ。
　おっと、仕事の依頼を受けている最中の魔女は、箒を逆さにするのがしきたりなんだ。これを『アルマル』と言う。この因習、いい加減終わりになんないかなぁ。だってこれ、「私は今、依頼を受けている最中です」というサイン以外に、なんの意味もないんだもん。逆さにすると箒って案外、重いし、ときどき風に流されて危ないし、もちろん、人混みはたいへん緊張する。アルマルでへまをするような魔女は、あまりいないけどさ。
　ゴーレムハウスの、２０５号室の前まで来ると、私はポーチからコンパクトミラーを取り出して、髪が乱れていないか確認した。よし、きょうも私の前髪ちゃんは絶好調だ。面差しもなかなかいい。唇がやや大きいこと以外は、不満点のない顔だちだ。
　インターホンを押した。
「はじめまして、魔女の茜一華です」
　そう、私の名前は、茜一華、今年で二十三歳になる、まだ若い魔女だ。
　玄関が開き、若い男性が出てきた。上下ともグレーのスウェットだ。
「いやぁ、いらっしゃい。待ってたよ。依頼主の宮下大悟です」
　依頼主の宮下大悟に、部屋に招き入れられた。
　部屋はぐちゃぐちゃの、ゴミが散乱した状態だ。
「これはなかなか」
「そうだろ。そろそろ、大掃除しなきゃいけないんだけど、一度、魔女に掃除して貰いたかったんだ。ところで、掃除には時間はどれくらいかかるんだ？」
「早くて十分、遅くとも三十分はかかりません」
「凄いな、さすが魔法だ。これで映画を観に行けるぞ！」

　宮下は感心しきりだが、私は肝心な話を切り出した。
「魔法でホコリだけを取り去るコースと、魔法でホコリを取った上に整理整頓するコースと、魔法で部屋がとてもすっきりするコースがありますが」
　そう、私は、部屋の掃除の依頼でこの安アパートにやってきたのだ。
「ホコリだけを取るコースが一番安いんだろ」
「そうです」
「それにしよう。今金欠だし。いくらだい？」
「水晶で占って決めます」
「ああ、そうなんだってな。占ってくれ」
　私はポーチから水晶を取り出すと、神経を集中させた。
「ほぅ、これはこれは」
「どうした？」
「この部屋の掃除は少々高くつきますが……」
「そうなのか……」宮下は渋い顔を見せた。「それでいくらだい？」
「三十万円ほどです」
　彼は、さすがに驚いたようだ。
「……えっ、いま何て言った？」
「だから、三十万円です」
「いや、三十万円も出したら、ちゃんとした掃除屋を何回も呼べるよ」
「どうなさいますか？」
　唖然としていた宮下だが、何か閃いたのか、落ち着きを取り戻したように見える。
「ああ、わかった。値切るんだな。値切り交渉は嫌いじゃない。いくらまで負けられる？」
「いえ、三十万円です。びた一文、負けられません」
　宮下はいささか不機嫌になったようだ、口を尖らせている。
「友達は、二万円で掃除して貰ったぞ。もちろん魔女にだ」
「魔女は、一人ひとり相場が違いますし、その時の体調や、物件や、季節や、天候や、月の満ち欠けでも料金が変わってきます」
「つまり、掃除をして欲しかったら、三十万円払えと？」
「まぁ、そうですね」
「他の魔女に交代してもらえないか？」
「あいにく、私は魔女の友人が少ないものでして」
　宮下が歯ぎしりをしている。
　私は嘘を言っていない。魔女の友人は二十人ほどしかいない。ふつう魔女は、魔女の友人が百人はいるものなのだ。
「悪い、帰ってくれ。三十万円はさすがに払えない」
「では、一万円を払ってください。解約金です」
「この、ごうつく魔女め！　　大学生が一万円を稼ぐのが、どれだけ大変か知らないんだろうな！」
　私は、解約金を受け取ると、部屋を追い出された。逆さの箒を元に戻すと、階段を下りてゴーレムハウスを出た。

　きょうも、私は仕事をしなかった。

　話はこれで終わりではない。
　私は、ゴーレムハウスを出た後、上空で観察を始めた。
　依頼主の宮下大悟、いや元依頼主の宮下は、どうやら自分で部屋の掃除を始めたようだ。これでは、映画を観に行くのは無理そうだ。
　一時間後、トラックが現れてゴーレムハウスの前に止まった。引っ越しのトラックだ。今は、三月の下旬、引っ越しのシーズンだからね。業者によって、荷物がどんどん２０４号室に入れられていく。
　だが、困ったことが起きた。背の高い特殊なタンスがあり、なかなか玄関を通らないのだ。完全に二階の通路を塞いだ状態で、立ち往生だ。
　そこへ、ゴミ袋を持った宮下が、部屋から出てきた。掃除は終盤のようだ。
「こんにちは。どうかしましたか？」
　元依頼主の宮下が、新しい隣人に挨拶をした。
「あっ、すみません。隣に引っ越してきた者です。タンスが部屋に入らなくて……、すぐになんとかします」
　若い女性が、焦りながらそう言った。
「早川さん。これ、入りませんね。時間がかかりますが、専門家を呼びますか？」
　引っ越し業者が言った。
「あっ、オレ知ってます」宮下が慌てて言った。「そのタンスは、実は分解できるんですよ」
「えっ、そうなんですか？」
　若い女性は目をぱちくりさせた。
「ほら、ここにつなぎ目があるでしょ」
　宮下は、タンスの中間あたりに指を向けた。
「ホントだ」
　若い女性、早川の目が輝いた。
　宮下の助言で、タンスは分解され、無事部屋に入った。
「ありがとうございました。私は、四月からＡ大学に通う、早川つばさと言います」
「あっ、オレ、Ａ大学の学生だよ。オレは宮下大悟、来年度から２年生だ」
「ホントですか？　　奇遇ですね」
「わかんないことがあったら何でも聞いて。カルト宗教の勧誘にはくれぐれも気をつけてね」
「ありがとうございます。はい、気をつけます」
「あと、ぼったくりの魔女にも気をつけてね」
「何ですか、それ」
　早川つばさちゃんはあどけない笑顔を見せた。
　ふたりは、どうやら打ち解けたようだ。

　もし、私が仕事をして、魔法で部屋を掃除していたら、この出会いは違うものになっていただろう。宮下大悟は映画を観に行って、早川つばささんと親密になることもなかっ

たかもしれない。
　私は、ポーチから缶ビールを取り出すと、やおら飲み始めた。
「働かないで呑むビールは、チョーうめ～！」
　飲みながら、箒を自宅の方向へ向ける。
　そう、私は、仕事をせずに問題を解決する魔女、茜一華です。
　以後、お見知りおきを。

第１話　おわり

第２話「ダイエットの依頼」

「わかったぁ？　　詰まるところ、魔法でウエストをあと三センチ落としてくれればいいのよ。そうすれば、このMサイズのスカートが余裕を持って入るのよ。できるでしょ」
　ここは都内の喫茶店で、私は依頼主とコーヒーを飲んでいる。もちろん、箒はアルマルの状態で立て掛けてある。
　今度の依頼主の木村恵は、赤いスカートを手にしている。ド派手だが、センス自体は悪くないスカートだ。でも、若い人が着る服に見えるなぁ。
「もう少し詳しく話を聞かせていただけますか？」
　仕事をしない魔女である、私、茜一華は質問をした。
「今付き合ってる彼氏がね、最近、いい感じじゃないのよ。三年も付き合ってるから、さすがに倦怠期かしら。そこで、このスカートよ。このスカートは、彼氏との初デートで着た物なの。これで彼氏も、若くて初々しい頃を思い出して、イチコロよ」
　なるほど、初デートで着たスカートか。
「木村恵さん。ご存じないかも知れませんが、魔法でダイエットをすると、確実にリバウンドします」
「知ってるわ。適正体重にリバウンドしちゃうんでしょ。問題ないわ。その頃には、私たちは婚約者だもん」
　そう、魔法でダイエットをすると、一時的には痩せるが、結局、適正体重にまで戻ってしまうのだ。

見たところ、この女性の適正サイズはＬだ。若い頃は、たぶん無理をしてＭを着ていたのだろう。だが、それは指摘しないのが魔女のたしなみだ。
「分かりました。占ってみます」
「よろしくね」
私は水晶で占った。
「この依頼、引き受けます」
「ほんと？　良かったわぁ、たすかるわぁ。あなた、いい魔女ね」
木村恵は上機嫌になった。
「それで、料金は二百八十万円になります」
ご機嫌だった女性の気分が、一気に変わったのが見て取れた。
「二百八十万円、いま二百八十万円って言ったの？」
女性は、スマホで何やら調べ始めた。おそらく、銀行の残高を確認しているのだろう。
私は解約金を渡された。
アルマルの箒を元の状態に戻して、私は喫茶店を後にした。

その後、木村恵は、彼氏とデートをした。Ｌサイズのスカートを穿いて。
ここは都内のレストラン。
「あれ、恵ちゃん、きょうは初デートの時のスカートを穿いてくるんじゃなかったの？」
彼氏が訊ねた。
「それが……、穿いてみたら、ちょっとキツくて」
「ゴメン。デリカシーのない質問をしちゃったね」
「それだけじゃないのよ」
木村恵はそう言って、おずおずとスマホの写真を見せた。
「これ、私の家族の写真。みんな、ぽっちゃりでしょ」
木村恵の家族は、みな、ふくよかな体型だった。興味深く写真を見ていた彼氏は、突然笑い出した。
「アハハッ、なんだそうか」
「笑わないでよ。勇気を出して写真を見せたんだから」
「違うよ！　違う違う！　いままで、恵ちゃんが家族の写真を見せてくれないから、本気の恋愛じゃないのかなって、オレそう思い込んでたんだよ」
「もちろん、本気よ！　なに言ってんのよ！」
「もっと見せてくれる？」
彼氏は嬉しそうだ。
「いいわよ」
恥じらいながらも、木村恵は家族の写真を見せた。

木村恵が、Ｍサイズの赤いスカートを着てデートをしていた場合、最悪、彼女は振られていただろう。
だが、そうはならなかった。
ほどなく、ふたりは婚約するだろう。

　これで良かったのだ。

　同じレストランの反対側に、私、仕事をしない魔女、茜一華がいる。
　もちろん、変装している。
　私は、グラスに注がれたビールを呑んだ。
「働かないで呑むビールは、チョーうめ～！」
　やばい、声が大きかったので、耳目を集めてしまった。
　でも、きょうくらいはいいだろう。

第２話　おわり

第３話「証拠隠滅の依頼」

　私は、今、ある大物政治家の事務所にいる。もう夜だ。
「なるほど、スキャンダルの証拠を消せと」
　私は、声のトーンを落として言った。
「そうだ」
　政治家、藤岡勝は強い口調だ。彼は、厚生労働省の大臣だ。
　藤岡大臣はまだ五十二歳と若く、人気と実力を兼ね備えた、次期総理大臣候補のひとりだ。
「これは困りましたねぇ。さすがに悪いことに魔法を使うのはちょっと」
「よく聞いてくれ。ええと……」
　藤岡大臣は秘書を見た。
「魔女の茜一華さまです」
　大臣は私に向き直った。
「茜くん。よく聞いてくれ。確かに私は賄賂を受け取った。だがね、その相手とは元々昵懇の間柄で、その上、彼には大きな貸しがあったんだ」

「つまり……、賄賂ではなく、貸しを返して貰っただけだと」
「その通りだ。もちろん、「これは賄賂にあたるな」と思って四日後に返したんだが、それを週間読朝の奴が蒸し返してきたんだ」
「四日後ですか……」
「重大な公務が重なっていたんだ。これでも最短で返したつもりだ」
　私は秘書を見た。
「古い友のところに、秘書だけで行かせろと？」
　藤岡大臣が抗弁した。なるほど、それもそうだ。
「浮気の件は？」
　藤岡大臣には、浮気のスキャンダルもある。
「それは事実無根だ。たぶん、私の政敵が、この機に乗じて偽情報を流してきたんだと思う」
　私は、ポーチから水晶を取り出した。
「占ってみます」
「そうしてくれ」
　私は、水晶で占った。
「嘘はついていないようですね」
　それを聞いた藤岡大臣は、とても安堵した様子だ。
「良かった」
「分かりました。五億円ほどでこの依頼を引き受けましょう」
「五億だと……」
　藤岡大臣は、秘書と何やら相談中だ。話がなが〜いなぁ。ふと横を見ると、箒がアルマルの状態、つまり逆さになって立てかけられている。このしきたり、やめないかなぁ。京都では、違うやり方をしてるらしいし。
　藤岡大臣と秘書の長話が終わり、秘書が近づいてきた。
「茜さま、解約金の一万円でございます」
　私は、藤岡大臣の事務所を放り出された。

　翌日、藤岡大臣が記者会見をしていた。
「……というわけで、私は浮気などしていません。これは事実無根です。現在、夕刊オットセイを訴える準備をしています」
　記者の一人が口を開いた。
「わかってないなあ。浮気はどうでもいいんですよ。問題は賄賂を受け取ったかどうか、ですよ。分かってます？」
「それは先ほど説明したはずです。君たちジャーナリストは、十のうちひとつでも落ち度があると、ペンで殴りかかってくる。だから、自己防衛のためにも、浮気と賄賂は別々に記者会見を行うと。賄賂の話は、明日の記者会見でキチンと説明します」
　記者たちがざわついている。
「聞いてくれ。私は逃げているんじゃない。あくまでも、浮気の疑惑と賄賂の疑惑は、別々に記者会見すると言っているだけだ」

記者たちから「賄賂は認めたようなものじゃないか」と声が上がる。
翌日の朝刊は、「藤岡大臣、浮気を否定」の文字が躍った。

翌日、藤岡大臣がまた記者会見だ。
「……というわけで、賄賂は受け取りました。その相手には、大きな貸しがあり、恩返しのつもりだったようです。そういう事情があったので、私も、断るのも悪いかなと思い、少額だったこともあり、つい受け取ってしまいました。しかし、賄賂は賄賂、これはまずいと思い、四日後に返却しました。ですが、一時的とはいえ、賄賂を受け取ったのは事実です。私は、その責任を取って大臣を辞任する意向です」
藤岡大臣が立って頭を下げた。
大量のカメラのフラッシュだ。
翌日の新聞の朝刊は、「藤岡大臣辞任の意向、恩返しの賄賂を拒めず」「篤実家の藤岡大臣、辞任か？」といった慎重な文字が並んだ。

数日後の藤岡勝の事務所、夜だ。
憔悴した藤岡勝のところへ、若い男がやってきた。
「父さん」
「ああ、孝夫か」
「父さん。紹介したい人がいるんだ」
若い男、藤岡孝夫の横に、美しい女性が立った。
「ぼくたち、結婚します」
「君は確か、霧島優子さんだね。でも、婚約は破談になったんじゃ……」
美しい女性、霧島優子が口を開いた。
「こんな誠実な政治家さんの息子さんと結婚できるなんて、私は幸せ者です」
「父さん。彼女のご両親がまだ納得していないから、結婚式は行わないけど、彼女はぼくについてきてくれるって」
笑顔になった藤岡勝は、立って、美しい女性に頭を下げた。
「どうか息子をよろしくお願いします」
「そんな、困ります」
霧島優子は、頬を赤く染めた。

その政治家の事務所の上空に、私、仕事をしない魔女、茜一華がいる。
魔法で証拠を消しても、疑惑は燻り続けただろう。藤岡勝は大臣を辞任したが、真摯な記者会見をしたお陰か、辞任の前よりも人気が上がったようだ。魔法で証拠隠滅をしていたら、息子の藤岡孝夫の婚約は破棄のままだったろう。
魔法で証拠を隠滅しなかったのは、どうやら正解だったようだ。
私は、缶ビールの蓋を開けた。
「くぅ〜、働かないで呑むビールは、チョーうめ〜！」
やばっ、ビールを少しこぼしちゃった。

　てへぺろ。
　警備員が上を見てる、退散退散！
　私は、そそくさと逃げ出した。

第３話　おわり

第４話「新商品選定の依頼」

「今度発売する商品、どちらがいいのか、魔法で占ってほしいの」
　今度の依頼主は、コスメメーカーの社長、佐藤有紀さんだ。歳は訊けないが、三十代後半から、四十代前半に見える。
　私、仕事をしない魔女、茜一華は、コスメメーカーのビルの社長室に来ている。コスメメーカーといっても、大企業ではないのでビルは小さめだ。
「ひとつは、アイシャドウ。一重でも、遠くから見ると二重に見える優れもの。この手の商品はいままでにもあったけれど、我が社の商品は、値段と完成度が違うの。これは、あなたには関係ないわね」
　佐藤有紀さんは私を見た。私は二重なので、この商品のお世話にはならないだろう。
「ふたつは、口紅。十歳若返って見えるものなの。しかも、とてもナチュラルに。あら、これもあなたには関係ないわね」
　私はまだ二十三歳だ。その口紅をつけたら十三歳に見えるのだろうか？　　少々興味がある。私がはじめて紅をつけたのは、八歳の頃だったか、七歳だったか。
「あなたの唇、あのハリウッド女優みたいで素敵ね」
　悪意はなかったのだろうが、この女社長の言葉には少々カチンときた。大きな唇は私のコンプレックスなのだ。
「その唇に、この紅は合うかも知れないわね」
「試してみてもいいですか？」
　カチンときていたが、さすがに、コスメに興味の湧かない魔女はいない。
「いいわよ。後でね」

「両方とも商品化すればいいのでは？」
　私は探りを入れた。
「うちは中小企業、二つ同時に新商品をだす体力はないわ。そこで、どっちを先に発売したらいいのか、魔法で占って欲しいのよ」
「では占います」
　私は水晶を見た。
「分かりました。この依頼、四千五百万円で引き受けましょう」
　それを聞いた佐藤有紀は、くちをポカンと空けている。
　ほどなくして、解約金と一緒に、アルマルの箒を突っ返された。
「あの、口紅を試させて欲しいのですが」
「あら、そんな約束をしたかしら。歳かしら、最近、記憶力が衰えてきてね。じゃあね、バイバイ、若い魔女さん」
　私は、小さなビルを追い出された。

　その後、佐藤有紀さんの会社は、二重に見えるアイシャドウと、十歳若く見える口紅を同時に発売し、大きな話題になった。新商品が二つは無理があったと思うが、どちらがいいか結局、決められなかったようだ。
　この二つの商品は、他メーカーが類似品を出す直前だったらしい。もし、私の占いで、発売する商品をどちらかに決めていた場合、片方の商品のシェアを諦めることになっていただろう。

　私もさっそく、十歳若く見える口紅を買おうとしたが、これが簡単ではなかった。
　当初、二つの新商品は会社の直販サイトの専売だったので、私は、直販サイトでアカウントを作って口紅を注文したのだが、三十分後に強制キャンセル、アカウントはＢＡＮになっていた。
　名前を少し変えて、住所を局留めにして注文したが、一時間後にまた強制キャンセル、アカウントＢＡＮだ。
　あの女社長、相当怒ってるな。
　仕方がないので、友人に代理で買って貰った。

　口紅が届いた。さっそく、塗って見る。
　鏡を見る。おおぅ、二十三歳が十七歳くらいに見えるな。私の顔に、高校生の頃のようなハリとツヤが戻ったように見えた。だが、「十歳若く見える」は、少々大げさか。
　私は、自分の容貌を観察した。
　よし、唇がやや大きいこと以外は、理想的な顔だ。
　さて、十歳くらい若返ったら、やることは決まっている。
　ビールを呑むのだ。
　仕事をしないで飲む酒だ。旨いに決まっている！

第４話　おわり

第５話「後遺症抑制の依頼」

「新型コロナの後遺症を抑えて欲しいんです。ほんの二週間でいい。できますか」
　老いたクラシックの指揮者、菅田大介はそう言った。
　ここは、菅田大介の自宅だ。質素だが、楽器や楽譜などが整理されて置いてある。
「たぶんできますが、もう少し、詳しく事情を説明してもらえますか？」
　仕事をしない魔女である、私、茜一華はそう訪ねた。
「私は今、新東京都交響楽団と、ベートーヴェンの交響曲全集を録音中なんです。指揮者にとって、ベートーヴェンの交響曲全集の録音は悲願なんです。わかりますか。ほとんどの指揮者が、ベートーヴェンの交響曲全集を録音できずにこの世を去る中、運がいいことに、私はようやく録音の機会が回ってきたんですよ。八番までの録音が終わって、さあ後は第九だけだ、と思ったところで新型コロナにかかってしまったんです。それはまだいい。問題は新型コロナの後遺症がなかなか消えてくれないことです。これでは、満足な演奏はできないでしょう。いままで発売した三つのＣＤは、せっかく評判が良いのに、これでは画竜点睛を欠くことになってしまう」
　ここまで言って、菅田大介は咳き込んだ。
「大丈夫ですか？」
「大丈夫、いつものことです」
　菅田大介は咳止め薬を飲んだ。落ち着いたようだ。
「つまり、ベートーヴェンの第九を録音する間、新型コロナの後遺症を抑えて欲しいと」
「そうです、そうです。できますよね」
　菅田大介は目を輝かせた。
　これは、困るなぁ。「新型コロナの後遺症を治して欲しい」と頼まれたら、それはさすがに魔法でも無理な相談だが、「新型コロナの後遺症をしばらく抑えて欲しい」なら楽勝だ。正直、この依頼は受けたいところだ。
　私はポーチから水晶を取り出した。
「水晶で占ってみます」

菅田はうなずいた。
占いが終わった。
「この依頼、受けましょう。二千万円で」
それを聞いた菅田は、酷く落ち込んだようだ。
「……払えない金額ではない。だが、いざという時の蓄えが底をついてしまう」
菅田はよろよろと立ち上がると、アルマルの状態で壁に立てかけてあった箒を取り、私に返してきた。アルマルの箒、つまり逆さになった箒はいつも重いが、きょうは殊のほかずっしりと感じた。
「ご足労を掛けたようだ。解約金はあとで振り込みます」
菅田大介はとても悲しい目をしていた。諦念だ。こちらも胸が痛むな。

一年後、菅田大介の、ベートーヴェンの交響曲第九番が発売になった。
ＣＤのライナーノートにはこうあった。「録音の予定を半年遅らせて、その間、新型コロナの後遺症の様々な治療法を試し、万全の状態で録音をした」と。
このＣＤは、世界中で話題になった。それまで、菅田大介のＣＤは、「手堅いがやや面白みに欠ける」という評価が多かったのだが、今度の第九のＣＤは大変素晴らしいものだったからだ。中には、「カンダは新境地に達した。この第九は、過去の偉大な指揮者たちと比べても遜色がないレベルだ。できれば、一番から八番も録音しなおして欲しいくらいだ」との賛辞もあったほどだ。
病魔と闘ったことで、菅田大介は芸術家として円熟の境地に達したのだ。
菅田に限らず、大病後に爛熟する芸術家は多いものだ。ベートーヴェンがいい例だろう。彼は聴力を失ってから、数々の傑作を世に残した。

私は、自宅のマンションで、菅田大介の指揮するベートーヴェンの第九のＣＤを聴きながら、缶ビールを呷った。
「働かないで呑むビールは、チョーうめ〜！」
ビールは本当に美味しかった。
だが、私は涙を流していた。ＣＤを聴いて感動したのか、それとも、病魔に苦しむ老いた芸術家を見捨てた自責の念だろうか。今回は、さすがに良心が痛んだ。思い出すと心がチクチクする。
私は、水晶で占うと少し先の未来が見えるから、こうなることは分かっていたのだが、それでも今回は賭けだった。少しでもまずい方向に未来がズレていたら、菅田大介はベートーヴェンの交響曲全集を完成させられなかっただろう。
これで本当に良かったのか、やはり本人の希望通り、一時的にでも新型コロナの後遺症を魔法で抑えるべきではなかったのか……、仕事をしない魔女、茜一華は、今、自問自答しているところだ。
芸術と健康、いったいどちらが大切なのだろう？
「魔女協会は、私の個性を把握した上で、いつも、こんな仕事を回してくるんだよなぁ。大学を卒業後、いきなり、「マンションを買ってあげる」って言われて、おかしいと思わ

なかった自分も悪いんだけどさぁ」

そう、魔女協会は、この住み心地のよいマンションを人質に、魔法で解決しない方がいいと思われる、特殊な仕事を押しつけてくるのだ。むろん、魔女協会とて悪魔ではない。この仕事を五年続ければ、このマンションは私のものになる手はずになっている。この仕事を始めて一年は過ぎたので、あと四年の辛抱だ。

未来が分かる魔女はまれで、私にはそれができる。だが、未来が分かる魔女は、たいてい三十歳を過ぎると、未来がはっきり見えなくなってしまうものなのだ。そこで、魔女協会は、私の能力がまだあるうちに、最大限利用しようとしている訳だ。

それにしても、いつも、ギリギリ支払えない金額を依頼主に提示するのは、心が痛む。とくに今回は、激痛だった。だが、それをしないと依頼を受けることになってしまう。なんて嫌な仕事なんだろう。

嫌な仕事か……。

ちぇっ、ビールが不味くなった。

第５話　おわり

あとがき

どうも、雨澤はるです。

いやぁ、新シリーズ、連作短編『仕事をしない魔女』が始まりました。

めでたい、めでたい。

えっ？　「『魔法使いもどきの冒険』はどうした？」

それがですね、少々事情があって書けてないんですよ。ちょっと私生活がドタバタしていまして。小説を書く時間はあるものの、長編小説に取り組む精神的余裕がないんです（ はっきり書いておかないと変な勘違いをする人が出てくると思うので、書いておきます。高齢の親の介護が始まったのです ）。

そういう訳で、『魔法使いもどきの冒険』は、２０２３年中の完成は難しいかと思います。
たいへん申し訳ありません。
ご了承ください。

また、どこかでお会いしましょう。

２０２３年12月上旬

仕事をしない魔女

著　　雨澤 はる

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社